

# 旭日重光章の叙勲を受けて

東京大学名誉教授 政策研究大学院大学アカデミックフェロー  
Health and Global Policy Institute および Impact Japan 代表理事  
黒川清先生 (昭37卒)



撮影：佐久間哲男

が広く、世界にあからさまになったのが「3・11」でした。

もどんどん発言して、というお墨付きと思う。大きな不確実性をもって変化していく世界で、日本の若者達が一人ひとりの将来を、グローバル世界の市民の一人としての意識を持ち、自分のキャリアを見つけ、追求していく手伝いを、ちょっとでもできれば嬉しい。

感じ、私が入力してきたところですが、何人もの学生さんが「入局して研究留学―帰国―タテ組織で昇進する」というワンプアーンではないキャリアで、世界で活躍している人達もかなり出てきました。

「今の若者は内向き」と言われますが、間違いです。今の大学生は平成の初めの数年間に生まれている、親世代は大人になってバブル経済がはじけた後の社会を生きてきた。若者達は子供の頃から元気の出るような話を聞いたことがない、親達の多くも自信を失っているのです。

私の同窓生の年代になると悠々自適の方も多いが、私は若者たちと楽しむ機会に恵まれ、年の2、3月分程度は海外に会議、講演などに出かける機会がある。そこは大学、ビジネス、政治などでグローバルキャリアの「独立」した個人が多いし、私は「ヘンな日本人」と思われているフシがなくもない。

平成23年度春の叙勲で旭日重光章を受けました。私は東大を卒業して7年目の1969年、安田講堂炎上、アポロ11号の月面着陸を見て渡米、医師として足掛け15年、米国の大学でキャリアを積みました。UCLA内科教授として5年目の秋、尾形悦郎先生(昭31卒)に誘われて東大第4内科助教として1983年に帰国。1989年に第1内科教授に就任しました。1996年、東海大学医学部長として東大を定年前退職。

私の経歴は日本人としては変わっています。受章理由は多様と思いますが、日本学術会議大改革のとき、新しい法

律を政治的にまとめることの会長だったし、新しい学術会議では女性会員が20%になったし、その後、安部・福田両内閣で、学者としては初めてだと思いますが、内閣特別顧問を務めたこともありません。あまり何事もお受けしたもので、新聞で発表を見たときに、私と同じようなキャリアの方達は瑞宝章という違う区分なので、自分なりにこじつけた理由です。

27年前に帰国して東大で12年ほど教鞭をとりましたが、学生さん達は優秀で、世界でキャリアを伸ばす可能性があるのにと感じました。教育のあり方、制度を含めて、人材育成が一番大事と痛

危ういと思います。今、実権を握っている「オジサン達」には問題あり。90年代初めまでは、大学を出て、終身雇用、単線路線、年功序列の「タテ社会」で、男性中心の組織や社会で成功と見ていた。1990年バブル

経済が崩壊、冷戦が終わりに、インターネット時代が始まりグローバル世界へ。日本は大学も含めてこの20年、グローバル世界に適應するようには変わっていない。国家として弱くなっている。これ

日本の社会は女性にとっての「ガラスの天井」がかなり低い。だから能力ある女性は自分で頑張つて、独立した人間としてキャリアを積んでいくことになる。個人としては一人当たりの価値は男性より大きい日本女性はたくさんいる。男性は組織の中に留まり、年功序列で昇進していくという。東大などを出た優秀な人が役所や大企業で10〜15年働くうちにほとんど卒にはめられていく、開通さが失われていく、才能が発揮されないのを見るのは悲しい。

帰国して27年、私の発言、発信、行動はほとんど変わっていない。単線路線の日本タテ社会・組織から外れてきたことも良いことだと、この叙勲で評価された。これから